

写真とエレナちゃんの手紙は全て「notes left behind」の公式HPより。

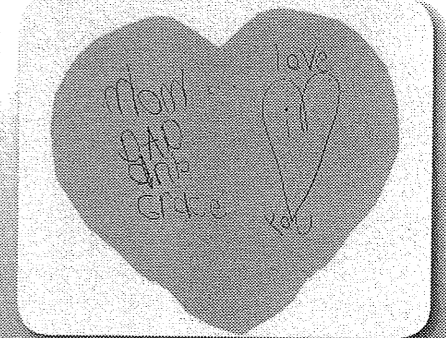
6才で死んだ娘が 天国からの手紙

机の引き出しから、クローゼットから、化粧台から次々と...

亡くなって2年たったいまも、エレナちゃんが書いた手紙が家の中から見つかることがある。衣装ケースや化粧台、本のすき間から……。6才の子は、病気になった自分の運命を悟っていたのか、家族への手紙を何通も遺していた。茶目っ気たっぷりの方法で――

「最後のほうは手も動かせなかったのに……」
エレナちゃんが悪性の脳腫瘍、びまん性グリオーマとの診断を受けたのは06年11月末のことだった。

余命135日――医師は家族にそう宣告した。両親は幼いエレナちゃんにはそのことは一切伝えず、彼女の前に出る時は涙をふいて、笑顔でなんともないふりをするしかなかった。



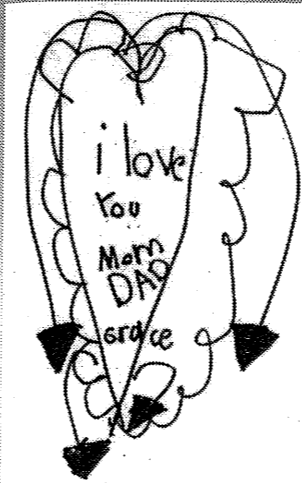
手紙はある日突然、届き始めた。アメリカ・オハイオ州に住むキース・デサリーリッチさん(34才)が何気なく机の引き出しをあげると、そこに見覚えのある絵と文字が書かれた紙きれを見つけた。

「i Love You Mom DAD GRACE」
(原文ママ)

それはまちがいない、少し前に脳腫瘍で亡くなった最愛の娘のエレナちゃん(享年6)の字だった。

「見つけた瞬間は、あまりの驚きに何も考えられなくなりました」(エレナちゃんの父・キースさん、以下同)

しかし驚きは、この一度だけで終わらなかった。エレナちゃんから家族にあてた手紙



「この手紙は、両親とエレナちゃんの闘病日記とともに一冊の本「notes left behind」に綴られ、10月27日アメリカで出版されるや、全米の書店でたちまちベストセラーに(邦訳は10年に早川書房から出版予定)。インターネット上には公式サイトが設置され、毎日1万件近いアクセスがあり、大きな感動が世界中に広がっている。

「そのとき、エレナの病気はかなり進行していた、うまく歩けなくなっていました。話す能力も奪われつつありました」

「最後のほうは手も動かせなかったのに……」

天国からの手紙

化粧台から次々と...

大きな悲しみに一家が包まれている中、エレナちゃん自身は「今年のクリスマスは、目一杯楽しく過ごしたい」と目をきらきらさせて提案した。そこで両親ははっとして、心にこう誓ったという。

「残された時間を、エレナのために特別なものにしよう」

それからは、どんなときもエレナちゃんを優先とし、彼女がしたいということと一緒にしようとした。

しかし、病魔は着実にエレナちゃんの小さな体を蝕

「仕事に行く前にエレナからキスをされる感覚はいまもはっきり覚えています。チョコレートを食べた後、私のところまで走ってきて、パパ、チョコのキスをしたい、っていうんです。私は出社しただけに会談だったので、顔に書いたチョコをあわててふきとっていました。それが親の喜びでもあったから、キスがでなくなるとはいいいちはん寂しかったです」

12月23日、2日遅れの6才のバースデーパーティーで、エレナちゃんは車椅子を嫌がって、歩行用の補強器具を使うことにチャレンジした。誰の手も借りずに、ぐっと歯を

くいしばってひとり立って歩いた。そしてお気に入りのレストランへ、おしゃべりして出かけた。

楽しみにしていたクリスマスは、それまで思うように食事もできなかったのに、ナッツやフルーツ、ピザまで食べ

ることができた。この日は大きな声で笑うことも話すこともできた。

しかし、よくなったと思える病状も次の日には最悪の状態に。一進一退を繰り返して、とうとうエレナちゃんの話すことができなくなりました。

「エレナは親や周囲の人に自分の気持ちを伝えるために絵を描き始めました。もともと絵を描くのが大好きな娘でしたから。メッセージと一緒に、ピンクやオレンジといったカラフルな色を使って、家族の似顔絵などを描いていました」

しかし、家族の願いもむなしく、07年8月11日、エレナちゃんは短い人生を終えた。宣告よりも120日長い、255日を生き続けた。

そして前述の通り、両親が深い悲しみに暮れていたある日、エレナちゃんが遺していた手紙を発見することとなった。

余命の話なんて絶対いえない、年がわりにおませさんだったから。どのメモも愛情にあふれていて、メモを見つけるとハグをしてもらったような、温かい気持ちでいっぱいになるんですよ」

死後2年たってもまた見つかることがあるという、天国からの手紙。その数は100通を超え、段ボール箱3箱分にもなるという。

最後にキースさんは、いまの思いをこう語ってくれた。

「最近見つけた2通は、封をしたまま読んでいません。エレナから届く手紙を永遠に終わらせたくないんです」